

默斗と喰晒

一ノ瀬 三郎

モクトは方丈のへりにならべられた坐蒲団の一つに、他の見学者らとともに正坐して待つ。襖が開き、涼やかな僧が入って来た。自分と同じくらい、齢二十二、三、彼に相違ない、モクトは思った。天くとも眼差しには叡智の輝きがある。

師は問うた。

「作麼生」

弟子睿胤は応える。

「説破」

「隻手の音声（片手で鳴らす拍手の音：周知のとおり拍手とは二つの手を打ち合わせて鳴らすものである）、何と聞くや」

「隻手に音声あるうはずもなし。高祖、眼横鼻直を言わずや」

「汝、口舌の徒にしかず」

「さよう。口舌の徒は口舌の徒にしかず。その沈たる侘び、寂たる莫の法。日用雑碗のごとし」

「下がりおれ、下郎。汝、笠の上に笠を被る者哉」

「御意に」

モクトにはまったく理解できなかったが、叱るようなもの言いながらも師の活き活きとした眼と、弟子の毅然として余裕ある態度から、答が「正し」かったに相違ないことを何となく観じ取った。恐らく同じ答を言ってもあの活殺自在と言わんばかりの気魄、気魄と言いながらも悠々たる、あの生命の独特の躍動感がなければ、合格にはならなかったに違いない。まさしく言語を超えた言語で応酬はなされていたのだ。

逆に言えば、人間は言語などというものを使いながらも、意志の疎通ができている不思議を想うべきなのかもしれない。

だが伊叙敝家の御曹司、モクトの目的はそれではなかった。麗しのユレア、それだ。

天平家の人間は不思議なことに唯一、招待されるのだ。眞神の邦に数々名家あれども、なぜか。この檜櫃の里に呼ばれるのは、この家だけなのである。しかしモクトにとって理由などどうでもよかった。お蔭で天平喩咽に逢えるのだから。

逢うとは言っても、言葉を交わしたことはない。

高貴な家柄の人間に有り勝ちなこと、天平家の人間はここに招かれても、つんと澄まして表情を出さず、冷淡で愛想もなく、蔑みの一瞥すら投げるのだ。だがユレアはそれゆえに更に高嶺の花、より高貴に美しく見えていた。

美しく誇り高く気高い冷静な女性を夢中にさせ、身も心も奪うことほど、男の狩猟本能を駆り立てるものはない。伊叙敝斗もまた古く高貴な家柄の人間に相応しい太古の野蠻を持ち合わせていた。

さて、法会は毎年、霜降（そうこう）二十四節の第十八の初候に行われたが、公案（公府の案文。原意は官公庁の公文書）を以て行われる師弟の対決とその後の茶会が主要な内容であった。その後も弟子を替えて問答は続き、八人が終わると茶会の準備が整うまで一時散会となった。

モクトは漫然と庭を歩く。楓はあでやかな赤に染まり、幾許か散る。

緑の苔の美しい枯山水は奇妙な幾何学的形状の石が不自然なほど離れていたり、そつぽを向くように反りながらも、近しく置かれたりして、不可思議な間合いを以て動きのある静寂を創り上げていた。

天護壬申寺は曹洞宗の寺である。創建は672年、まさに壬申の乱の頃である。当初は法相宗の寺として興ったが、やがて禅宗に落ち着く。法相宗と禅との因縁は深く、遣唐使として唐に涉つて玄奘から直々に法相の教義を伝授され、日本に帰国後、法相宗を広めた道昭がそもそも唐に留学中に玄奘から禅を勧められ、禅院を建て、坐禅を修行している。

それゆえ壬申寺が禅寺であつても不自然ではない。もつとも話はさほど単純ではなく、華嚴宗になり、真言密教になり、曹洞宗の寺となつたのである。その遷移の様や所以は稿を改めて語ろう。

モクトは築山の後ろに初めて廻つた。

そこには濡れたように黒い大巖があり、苔生していたが、よく観ると文字が彫られている。古文書好きでよく古事記や日本書紀なども漢字表記の原文で読むなど、慣れていたので無意識的に読んでいると、なぜ自分が今までこれを知らなかったのかと思うような衝撃の事実が録されていた。

それは元禄年間に寄贈されたもので、寺の由縁を刻んだものである。その大凡の内容は左のとおりだ。

『天護壬申寺は咲御魂獅厨麻神社のごとく怨霊鎮魂寺である。』

大和朝廷にまつろわぬ夷狄であつた眞神族の大貴族、天平天憤咽火去は艸隈願斐の原に砦を建て居城し、大和朝廷の大軍の將、多比見大津琉義と対峙した。

天憤咽火去は大和軍を撃破するも、その後、和議を申し出た多比見大津琉義の主催する宴に招かれ、騙し討ちに遭い、落命する。

伊弉敝族の王家であつた伊弉敝家も、大本は夷狄であるが、早くから大和朝廷の夷俘（俘囚のうち、比較的隷属の度合いが軽い者。なお俘囚とは、朝廷の支配に属するようになった蝦夷の者たちを言う）又は俘囚となり、朝廷側に与して眞神を攻めた。

戦後二百年経つた平安の時代、伊弉敝家に次々災いが起こり、怨霊の祟りであると陰陽師が言い、従前からあつた神社や寺が鎮魂寺や鎮魂社とされ、慰霊の祭りが数々行われるようになったのである『すなわち伊弉敝黙斗は天平喻咽亜の仇敵なのである。』

ユレアは知っているに違いない。だからあのように冷淡なのだ。

「しかしそれは古代の話だ。」

俺たちに関係はない。彼女もわかっているはずだ。そんなに愚かではないだろう。俺たちは仲良くやっていく」

しかし又こうも想うのである。

「だがそれは加害者の勝手な考えではないか。被害者の感情はそんなものではないのではないだろうか」
そしてさらに、

「とは言え、すべて時の運、時代だ。已むを得ないじゃないか。仕方ないんだ。時に強く、時に征服され、時に侵略し、時に蹂躪される。それが歴史だ」

だが結局、

「と言うものの、加害者のご都合主義的なロジックではないのか……」

彼はユレアの様子を見に行くことにした。散々探したが漸く宝物殿でその姿を見つける。彼女はガラスケースに展示された茶碗や粘葉装の茶掛などを見ていた。

「歴史に興味があるんですね」

モクトは思い切って声をかけてみた。

「いいえ。それほど興味はありません」

少し驚いたふうだったが、表情に出さず冷静に応える。モクトは安堵した。よかった、歴史になんか興味がない方がいい。

「あ、すみません。僕は、伊釵敵黙斗と言います。伊釵敵家の人間です」

「知ってます」

「え」

モクトは焦った。思考してその意味を分析し、混乱した。なぜ知っている。男として興味があった？ それが一番先に想い泛んだが、一番先に打ち消された。そんなはずがない。やはり仇敵として意識していたということか。だがなぜ自分か。他に本家の代表的な人物がたくさんいる。自分など若造だし、小物だし。

「あ、知っていただいて、光栄です。毎年来られていますから、その、記憶力がいいんですね。一年に一度、来るだけで参加した人を憶えて」

「そうですか？

普通だと思います」

「檜樞の里、神栖檜樞はどうですか。この寺の法会には興味がありますか？」

「禅問答は好きです。哲学好きだから」

「哲学好き……睿胤のことはどう思います」

実はモクトは前から怜悯な美青年の睿胤を目的にユレアが来ているのではないかと密かに疑っていたのだ。

「知的な人です。」

でも」

「でも？」

「いいえ。何でもありません。失礼します。お茶会の前に、もう少し見ておきたいので」

再び閲覧を始める。何だろう。何を言いかけたのだろう。気になったが、訊くすべもなかった。そう言えば神栖檜樞はどうですかと訊いたことへの応えはなかったなあ…

茶会も終わり、帰り際、安土桃山時代に造ったと伝えられる絢爛豪華な門の写真を撮ろうと思い、カメラ機能を立ち上げたスマートフォンを構えた。まさにそのとき門を通り抜けようとしたユレアが足を止める。

「あ、失礼しました。門を撮影しようとしていたんです」

「いいえ。お邪魔しました？」

「とんでもない、大丈夫です。」

……立派な門ですね。今回初めて気が付きました。鎮魂寺には見えませんね」

敢えて振ってみた。

「鎮魂なんて必要ないのに。」

死んだ人間はもう生の執著に由来するこの世の価値のすべてを超越してしまっていて、憤りも恨みも飲みもな
いと思いますよ。

この世のことなんて、附与された価値が踊ってるだけのものじゃない。感覚の上に紡がれた刹那の現象に過ぎ
ないじゃない」

モクトはしばらく言葉が出なかった。

「凄いいこと言ってますね。僧侶みたいだ」

「これが真神の伝統です」

「でも、よかった」

「よかった？」

「え、あゝ、いや、その」

「は？」

「つまり、何と言うか、恨まれてなくてよかったな、って」

「恨む？」

「伊弉敝家を恨んでいなくてよかったな、と」

「私が？ 当たり前じゃない。」

こんな壮麗な鎮魂寺なんて、必要じゃなかったわ。

でも災いが怖かったんでしよう。当時の人々は。あなたが怖れる必要なんてさらさらないわ。加害者じゃないし、私も被害者じゃないし、そもそももう大昔のことよ。

ふふ。本気で言ってるの?」

何となく、言わなきゃよかったとモクトは後悔し始めた。確かに良く考えてみれば、自分の言っていることはおかしいことだった。普通に日常的感觉で見れば、嘶らかに変挺りんなことを言っていた。

「すみません。結構本気で……」

いや、実はあなたに声をかける口実が欲しくて」

ユレアは眼を少し見開いたが、

「あら、そういうこと。

でも、ごめんなさいね」

そう言ってくるりと背を向けると、軽やかな足取りで颯爽と歩き始め、二度と振り返らなかった。それを見送りながらモクトは彼女が眷胤について「でも」と言った後の次の言葉が何だったのだろうかどぐろどぐろ考えていた。

